琉球大学学術リポジトリ

子どもが安心して楽しく学べる学級づくりー暴れん坊成敗の学級づくりからの脱却ー

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 琉球大学大学院教育学研究科
	公開日: 2023-05-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 池崎, 知恵子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019858

子どもが安心して楽しく学べる学級づくり

―暴れん坊成敗の学級づくりからの脱却―

池﨑 知恵子

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・那覇市立開南小学校

１． テーマ設定の理由

筆者は，学校教育において「子どもが安心して学校に来て，平和が確保された学級で学ぶことが一番。」と考えてきた。教職大学院入学前の筆者は，ストレスをあからさまに表に出すような子を問題児と捉え，担任する機会が多かった。筆者のこれまでの学級づくりの基本コンセプトは，「このような問題児＝『暴れん坊』を成敗することで学級の平和を確保し，みんなの安全を保つこと。」であった。ルールを守ることを徹底し，集団としてのまとまりを重視することが良いと思って指導してきた結果，学習規律を確立し，一見落ち着いた学級をつくれたと自己評価してきた。しかし，近年子どもの家庭環境は多様化し，複雑な背景や生きづらさを抱えた子が増えている。こうした状況下においては，単に「暴れん坊」を押さえつけるだけでは，子どもが安心して楽しく学ぶことはできないのではないかと考えるようになった。

これまで筆者が「暴れん坊」と捉えていた子ども以外にも，学級には自分を出さない子や大人の機嫌をうかがう良い子（を演じる子）などが多く存在し，その子の背景を見ようとしてこなかった筆者の学級づくりを振り返ると，これからの筆者に必要なのは，多様な性格をもち多様な環境下で生活する子どもへのケアであり，子ども同士のつながりづくりである。筆者は，今学校教育現場で求められている「安心する学級」を「居場所があり，自分らしくいられる学級」と捉え直し始めた。「安心する学級」にするためには，これまでの筆者自身の学級づくり・学級観を脱却，アップデートしていかなければならない。

令和３年度の小・中学校における不登校児童生徒数は，244,940 人と過去最多を更新しており（文部科学省 2022），全国的に増加傾向にある。不登校の原因の 49.7％は「無気力・不安」であり，「学校が楽しくない」・「安心して通えない」ということである。筆者も現任校で不登校児の対応に悩み，この苦い経験から，「暴れん坊が成敗された学級＝安心できる学級」ではないかもしれない…と筆者の指導を顧み，「どの子も心から安心して楽しく学べる学級づくりをしていきたい。」と思うようになった。

現任校が毎年実施している「おしえてアンケート」の結果，第２学年児童が「学校が楽しい」と感じる最大の理由は，「友だちがいるから」であった。（令和元年度 91％，令和２年度 76％，令和３年度 89％）。ここから子どもの学校生活は，授業や先生といった他の何より「友だち」の存在が大きな割合を占めていることが読み取れ，子どもが楽しく学ぶために最も重要なことは，友だちがいることであると思える。

コロナ禍で，人間関係の構築がますます難しくなっている今こそ，このテーマについての研究を進め，安心して自己開示しつつ，友だちと協働して課題を解決することができるような子どもの育成を図りたい。そうすることによって，「子どもが安心して楽しく学べる学級づくり」ができると考えている。

２．　研究の目的

本研究では，どの子も安心して楽しく学べる学級づくりの実現を目指す。①教師が子どもを認め，一人一人を同じように尊重すること。②子どもが自分や友だちのよさについて知ること。③学級内において互いの存在を認め合い，子ども同士がつながっていくことの３点を学校の教育活動全体の中に“しかけ”，子ども同士のよりよい関係づくりの変容から，「安心して楽しく学べる学級の実現」を検証する。

３．　研究の内容

本研究においてまず必要なことは，筆者の「暴れん坊成敗の学級づくり」からの脱却・学級観のアップデートである。子どもへの言葉や接し方を変え，その後の変容から子どもを安心させるためにはどのようにすればよいか,「ニーズに合わせたケア」とは具体的にどうすることなのかを明らかにしていく。

また，子ども同士が知り合い，つながっていくことによって，仲間への信頼感が生まれ，それと同時に学級に居場所を感じることができ，自分らしく安心して学ぶことができるようになるだろうと考えることから,「安心して楽しく学べる学級の実現」に向けて，下記の５点に力を入れ，研究を進めていく。

（１）教師の言葉・接し方…注意を減らし，褒める言葉や認める言葉を増やす。子どもの声を聴き，ありのままを認める。子どもの背景や行動の原因を探り，その子のニーズに合ったケアを行う。

（２）子どもが自分のよさを知る…アンケート，自分を見つめる授業（主に道徳・学活），班活動。他者が知っている自分のよさに気付き，自分自身を大切にしようとする気持ちを育ませる。

（３）友だちのよさを知る…アンケート，友だちのよいところを探す（主に道徳・学活），班活動。他者に積極的関心を示し，理解しようとする。他者も自分同様に大切にする気持ちを育ませる。

（４）お互いの存在を認め合う…一人一人が活躍することができる場の設定，班活動，係活動等。お互いをよく知り合うことで，関係の中に安心感を生み出し，自分の居場所を感じさせる。

（５）子ども同士をつなぐ…行事の活用，ペア学習，グループ学習，遊び，学級イベントの実施等。子ども一人一人を網の目のようにつながらせ，そのつながりをさらに広げて，強くしていく。

特に（４）と（５）については，筆者が担任する学級で時間をかけて取り組む必要がある。従って，研究の２年次では，子ども同士が「つながっている」状態とはどうなっていることなのか，そのために何をすれば有効なのかを，前述の「ニーズに合わせたケア」と併せて明らかにし，整理していきたい。

４．研究の方法

（１）授業実践（９月の課題発見実習Ⅱでは学級活動）から，子どもの意識に変容が見られたかを，授業観察と子どもの振り返りシートの記述内容，事前事後アンケートの回答内容から分析した。

（２）教師が気になる対象児童Ａさんに対して，言葉掛けや働きかけなどのケアを行うことにより，その後，Ａさんの行動にどのような変容が見られたかを行動観察シートにまとめ，分析した。

５．研究の実際（課題発見実習Ⅱ［前期］：小学校２年生　３学級　令和４年９月５日～16 日）

連携協力校であるＡ小学校２学年３学級において，子どもたちが自分のよさをどれくらい感じているのかを検証することに重点を置き，構成的グループエンカウンターを組み入れて，計７時間の学級活動

を行った。事前アンケートでは,「あなたは自分によいところがあると思いますか。」の問いに対して「思う」と答えた子どもの割合が全国平均に比べやや低かったため，自己肯定感を高めることに留意すると共に，他者理解を促すため授業の振り返りに全体共有の場を設けお互いの思いを交流できるようにした。

（１） 授業実践事例

① 単元名「にこにこ・ぽかぽかクラスを作ろう」 題材名「友だちのいいところをさがそう」

② 本時の展開（２／４時）

過程	主な学習活動	・指導の留意点※準備○【評価】
導入 (5 分)	1．本時のめあてを知る。 めあて「友だちのいいところをさがそう。」	・本時のめあてを確認する。 ・学習の流れを説明する。
展開 (25 分)	2．友だちのいいところ探しをする。「言葉のプレゼント」を渡す。 ・４人グループを作り，一人につき１つ以上のいいところを書く。 がんばりや　足が速い　せいりせいとんができる 計算がはやい　絵がうまい　ピアノがとくい　おもしろい 明るい　やさしい　くよくよしない　いつも元気　おしゃれ ・残りのカードには自分の好きな友だちについて書く。 （できるだけ一方の性別に偏りが生じないように書くようにする。） ・カードを切り取り，友だちの背中に貼り付ける。 3．もらった「言葉のプレゼント」メッセージカードをまとめる。 ・もらったカードを１枚の台紙に貼り付けるようにする。 ・メッセージカードを読んで感じたことを自由に話す。 ・自分のいいところを言われて，どんな気持ちになったかを聞く。	※言葉のプレゼントカードを，一人６枚準備する。 ・教師の例文を参考にしてもよい。できるだけ６枚全部書く。 ・はさみを準備させる。 ・カードの裏に両面テープを付けておく。 ※もらったカードを貼る台紙を一人１枚，のりを準備。 ※拡大投影機を準備。 ・自分のよさについて，今日初めて知ったことを確認させる。
振り返り (10 分)	4．今日の学習を振り返る。 ・感じたことや気付いたことを，グループの友だち同士で伝え合う。 ・今日の授業を振り返り，自分が思ったことや感じたことを，ワークシートに書いて発表する。	【評価】（観察・ワークシート） ○他者を肯定的に受け入れ，よさを探すことができたか。 ○お互いの存在を認め合う気持ちを文に表すことができたか。

（２） 授業実践からの考察

① アンケート結果より（課題発見実習Ⅱ［前期］：小学校２年生 ３学級 合計 93 人）

アンケートの結果，授業前「自分にはよいところがあると思いますか？」という質問に対し,「ある」と答えた児童 75%。授業では「自分のことについて考えることができましたか？」「自分について新しい発見がありましたか？」という質問に対し,「できた」と答えた児童が 83%いた。授業後に「自分にはよいところがあると思いますか？」という同じ質問をしたところ,「ある」と答えた児童は 89%で，授業前と比べると 14 ポイント増加した。授業では「友だちについて考えることができましたか？」という質問に対し，99%とほぼ全員が「できた」と答え，授業後に「自分のことをわかってくれる友だちはいますか？」という質問に対して,「いる」と答えた児童は授業前と同数の 91%だった。子どものワークシートの記述から,「自分にはこんないいところがあったんだと分かった。」「心がふわふわしました。」「自分では（自分のよいところを）知らなかった。」「２組がもっと楽しくなった。」など，自分のよさついての新たな発見をしたり，嬉しさや学級への所属感を感じたりした子が多くいたことが分かった。

② 気になる児童Ａさんについて

行動を注意深く観察して，気持ちに共感しながら言葉掛けや支援を行い，それに対するＡさんの反応を筆者の自己分析と共に記録し，再構成した（表１）。徐々にＡさんと信頼関係を築くことができ，Ａさんの行動の変容から，ニーズに合わせたケアとは具体的にどうすることかを明らかにすることができた。

表１　行動観察シート

日時・場面	気になる児童 Ａさんの行動	筆者の対応	気になる児童 Ａさんの反応	Ａさんの行動についての筆者の自己分析 →暴れん坊成敗の学級づくりからの脱却ポイント
1 日目 担任 生活の 授業	学習態度が良くない。机に足を上げていて課題には全く取り組まない。	「ちゃんと座ろう。」と優しく声を掛けた。	机に足を上げたまま。筆者とは目も合わせず，注意されても無視した。	素直に言うことは聞かないが，初日に厳しい言葉で指導すると，警戒し，その後ずっと拒否されてしまうかもしれない。 →まずは優しく声を掛けてＡさんの反応を確かめ，様子を見ようと思った。なぜちゃんと座らないのかを知りたかった。
3 日目 筆者 学活の 授業	ワークシートに落書き。水で濡らし，窓に貼り付ける。筆者を名前で呼び捨てにする。	そばに行き，「Ａさんどうしたの。」と声を掛けた。	濡れたから…と授業には参加せず，言葉遣いの学習と知りながら，「バカ」などと発言。	以前の筆者なら，ワークシートに落書きしたり濡らしたりする行為について強く叱り，二度とやらないことを約束させた。 →Ａさんが何を考えていたのかを知り，このような行動をとった原因を確かめたい。ワークシートを窓に貼り付けて乾かそうとしていたのだから，破り捨てるよりマシだと思った。
4 日目 昼休み	昼休みにＡさんから「ジェンガしよう」と，遊びに誘ってきた。	昼休みにＡさんともう一人女の子と遊ぶ。	本来のジェンガは嫌だと言い，自分勝手に積み木遊びをして楽しんだ。	３日間筆者の様子を見て，この人は敵ではないとでも思ったのか？遊びに誘ってきた＝心のバリアが外されたと捉えた。 →どんな理不尽なルールであろうと，まずはＡさんのやりたい遊びを一緒にやって楽しむ。誘いには素直に乗っかった。
5 日目 筆者 学活の 授業	動き回り，勝手に電子黒板を触る。教師の許可もなく，黒板に文字を書き始める。	教師の代わりに，あえてＡさんに板書してもらった。	友達と声を掛け合いながら，楽しそうになかま集めの活動に参加することができた。	以前の筆者は黒板を勝手に触ったらすぐ注意。他にも触りたいが我慢している子がいる。ひいきするわけにはいかない。 →教師の代わりに板書してもらい，触りたい欲求を満たす。これはひいきではなくＡさんに必要なケアかもしれない。板書してくれたことに対して，「ありがとう」とお礼を言った。
8 日目 筆者 学活の 授業	ワークシートを全部書いて，「発表したい。」と意欲的に前に出てきた。やりたい気持ちが全面に溢れていた。	黒板の前に出てきたＡさんに，あえて最初に発表してもらった。	「２年２組楽しい。」と感想を言い，自分から席に座った。その後も終始笑顔で授業に参加していた。	以前の筆者なら，一番に指名する子はみんなの見本となる発表ができる子だった。興奮して前に出てくるような子は，落ち着かせるためいったん自分の席に座らせ，待たせていた。 →Ａさんはふざけて前に出てきたのではない。発表したいのだから，まずはその気持ちを認め，とにかく言わせてみる。Ａさんの発表したい欲求を満たしてあげれば安心するだろう。
10 日目 お楽しみ会	書くことが苦手なＡさんが，筆者に手紙を書いてきてくれた。	満面の笑みで受け取りゲームを楽しんだ。	膝の上に乗ったり後ろから抱きついたりしてきて，会を楽しく過ごした。	以前の筆者は，あまりにもベタベタ触ってくるような子には「先生はお母さんではないよ～。」と，やんわり断っていた。 →手紙を書いてくるなんて感動的だ。Ａさんからのボディタッチは筆者と仲良くしたい証拠かも…と捉え，受け入れた。

６．　今後の研究に向けて

学級づくりは 1～２回の授業だけでどうこうできるものではない。竹内（2003）は「クラスづくりとは，もともと子どもと教師が共同して新しい『物語』を日々織っていく営みであり，『現実』を日々変革的に再構築していく営みである。」と述べている。その場・その時・その子どもの実態に合わせて日々ケアを重ね，子どもと共につくる意識が必要である。長い目で子どもの変容を捉えながら，具体的には以下の３点に重点を置き，子どもが安心して楽しく学ぶことができるような学級づくりを行っていきたい。

①	教師の言葉掛け	注意を減らし，子どもの声を聴く。日常において教師の失敗談を話す。
②	ペア・グループ学習	授業で毎日必ず取り入れる。いろいろな友だちとのかかわりを増やす。
③	学級イベント	子どもが自主的に活動する場の設定。活躍の機会を設け，子どもに任せる。

子どもは常に変化している。教師も常に言葉掛けや接し方を変化させながら子ども観をアップデートし，筆者のこれまでの「暴れん坊成敗の学級づくり」から脱却すべく，子どもが心から安心するために必要なケアとはどうすることなのかを考えながら子どもとかかわり，共に学級づくりを楽しみたい。

引用文献

文部科学省，2022,「令和 3 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」（2022 年 10 月 27 日取得，https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400304&kikan=00400&tstat=000001112655&result_page=1）.
竹内常一，2003,『おとなが子どもと出会うとき　子どもが世界を立ちあげるとき』桜井書店.